

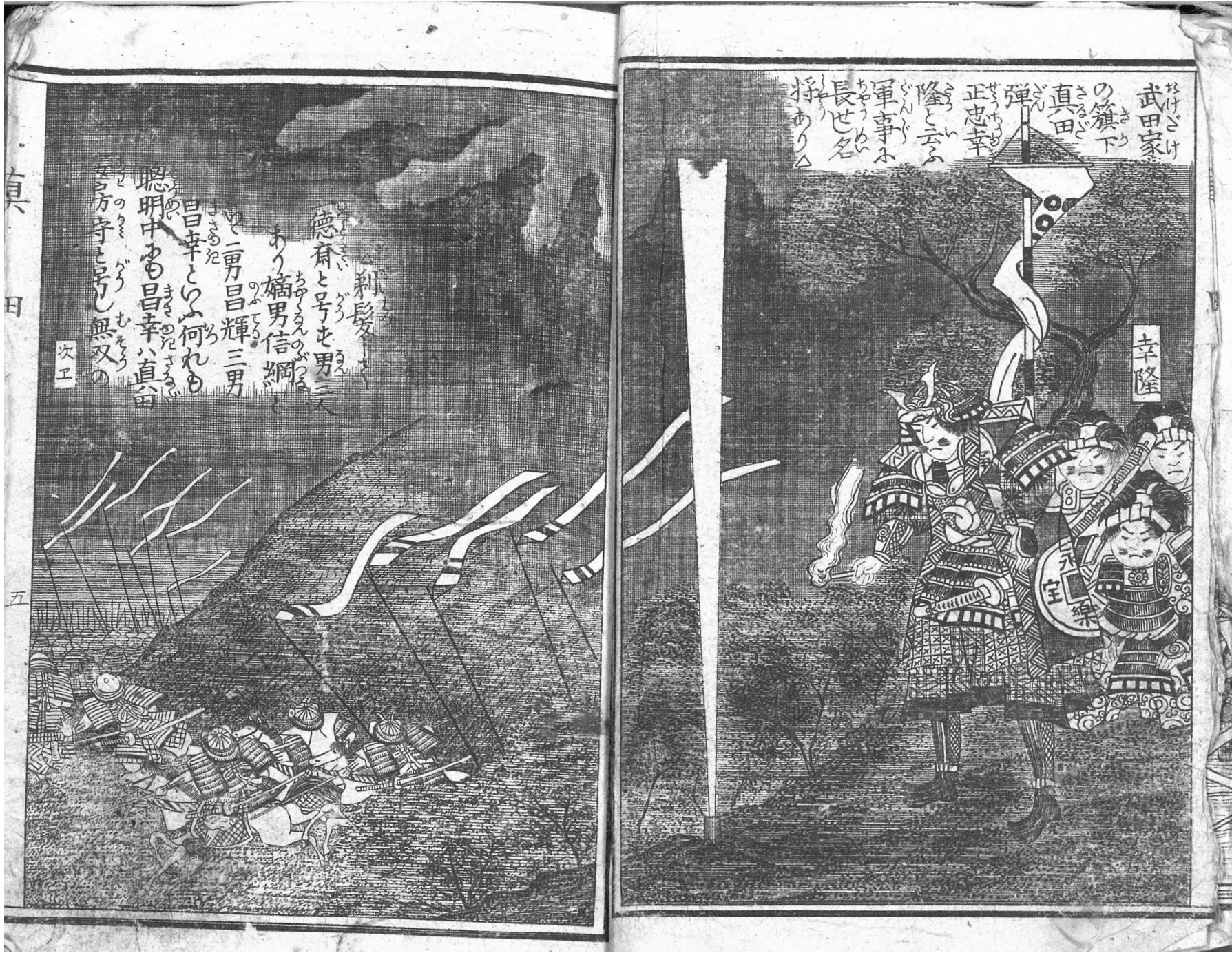
令和7年度 秋田県公文書館講座 古文書解読講座（初級）

第3回・第4回

■変体仮名徹底攻略■

「絵本真田三代記 全」(吉成1774)

古文書チーム 畑中康博



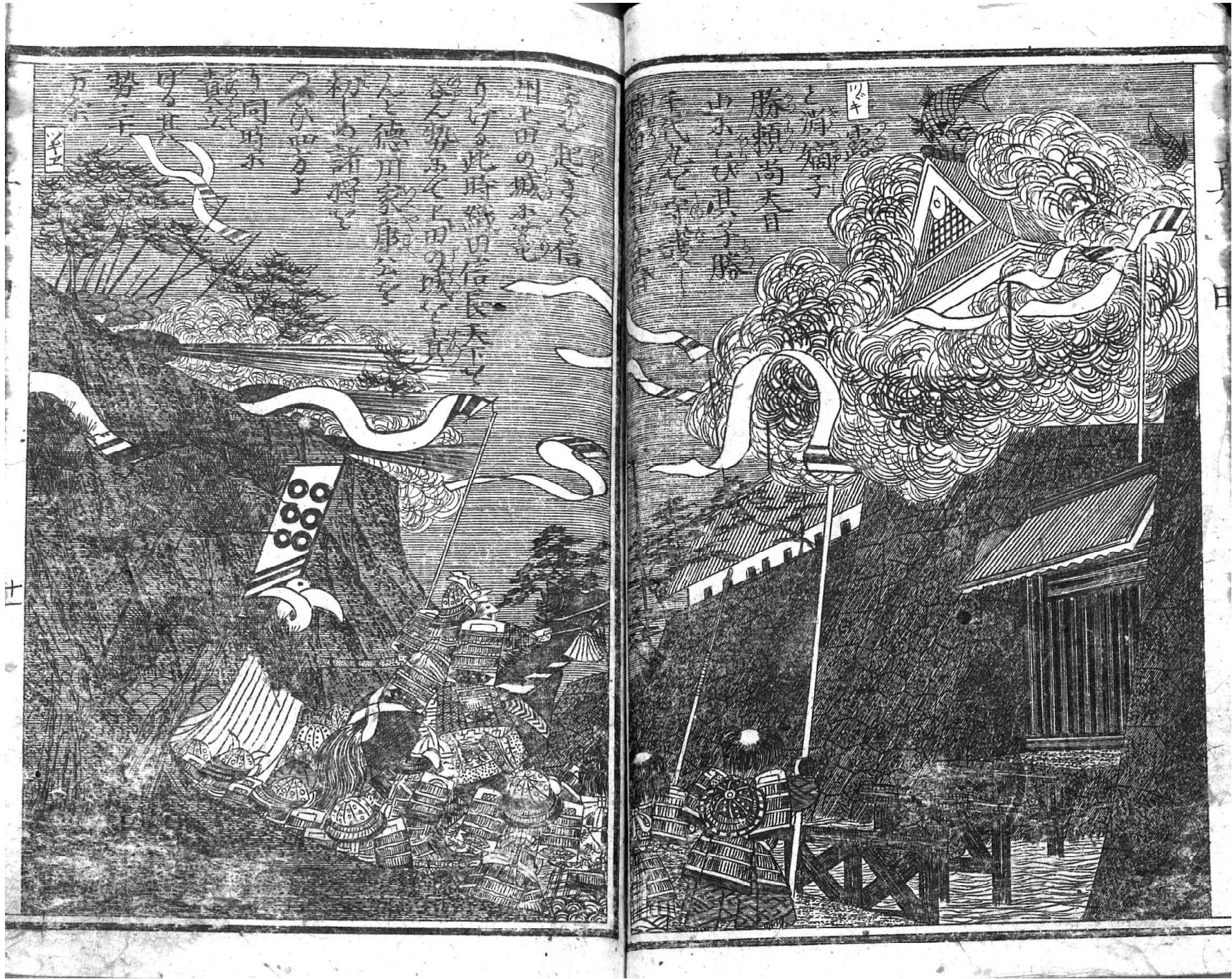


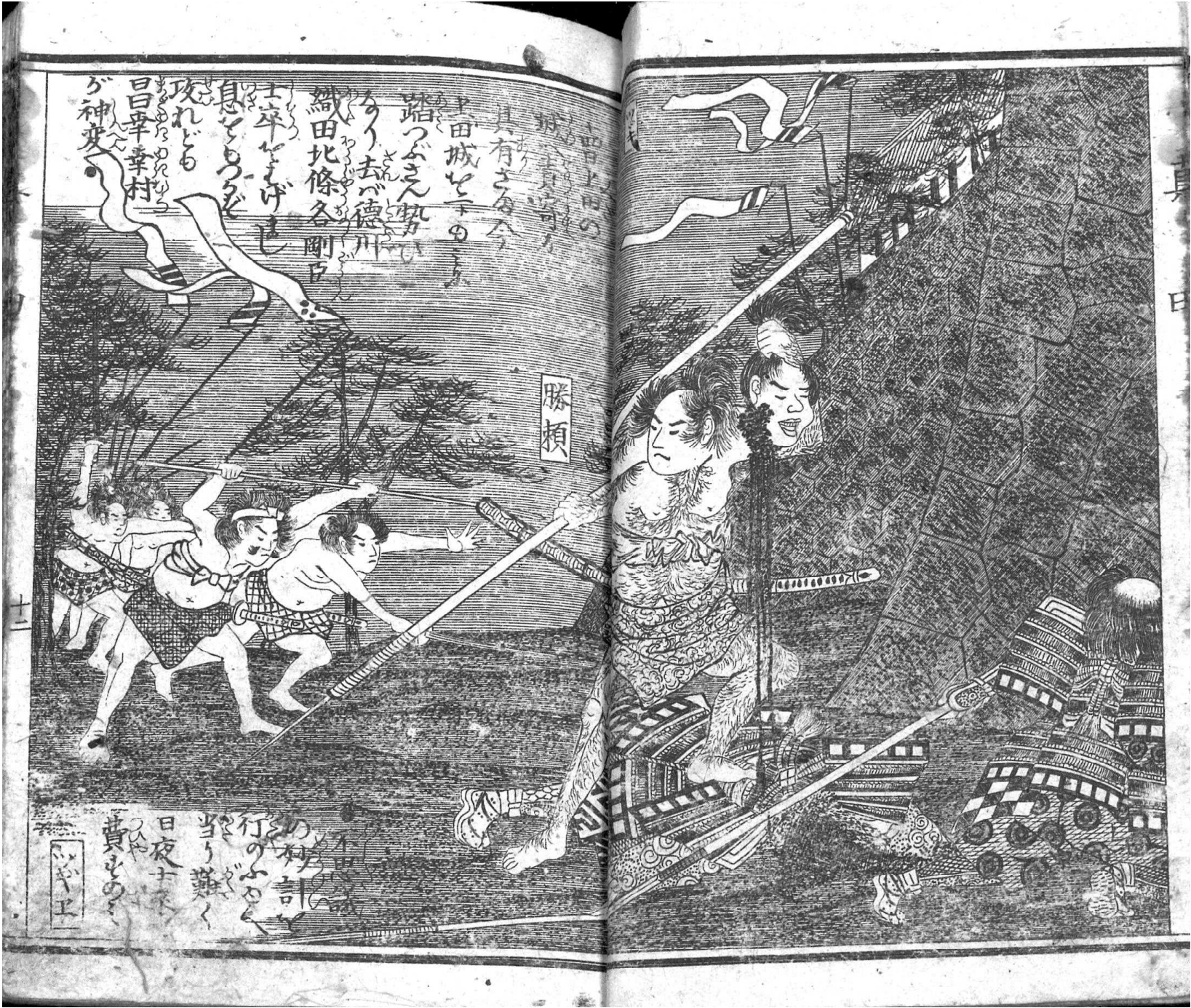




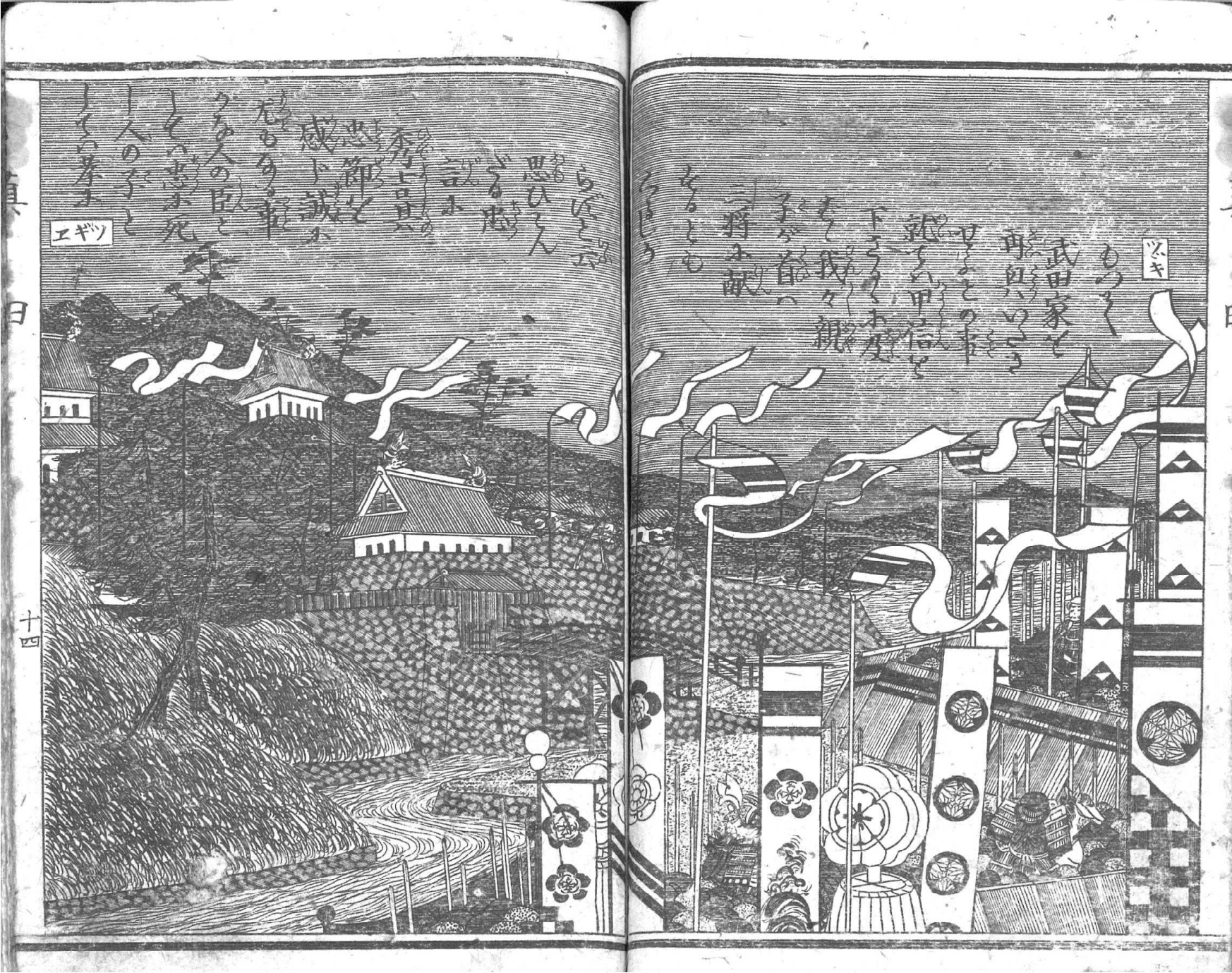




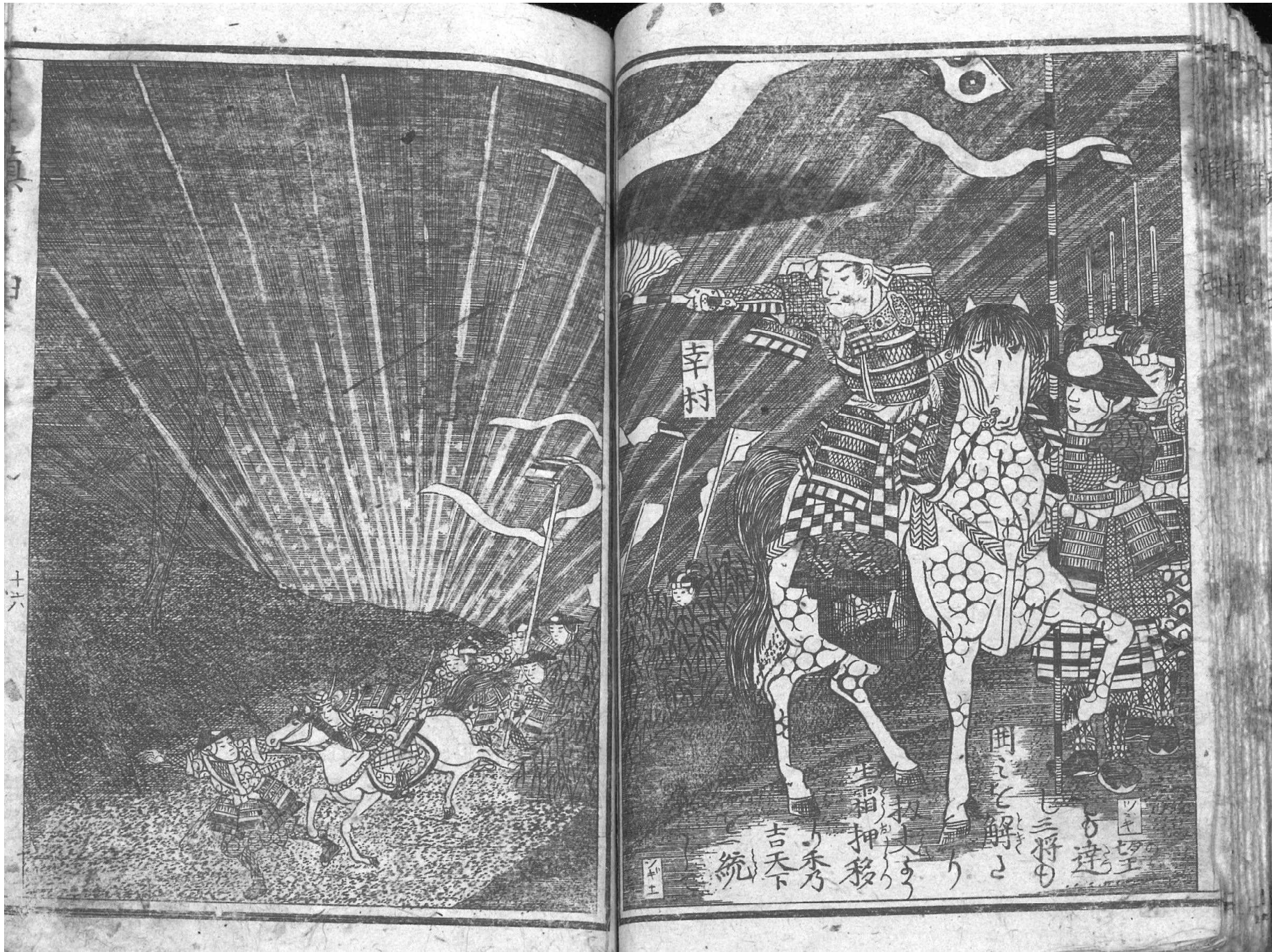








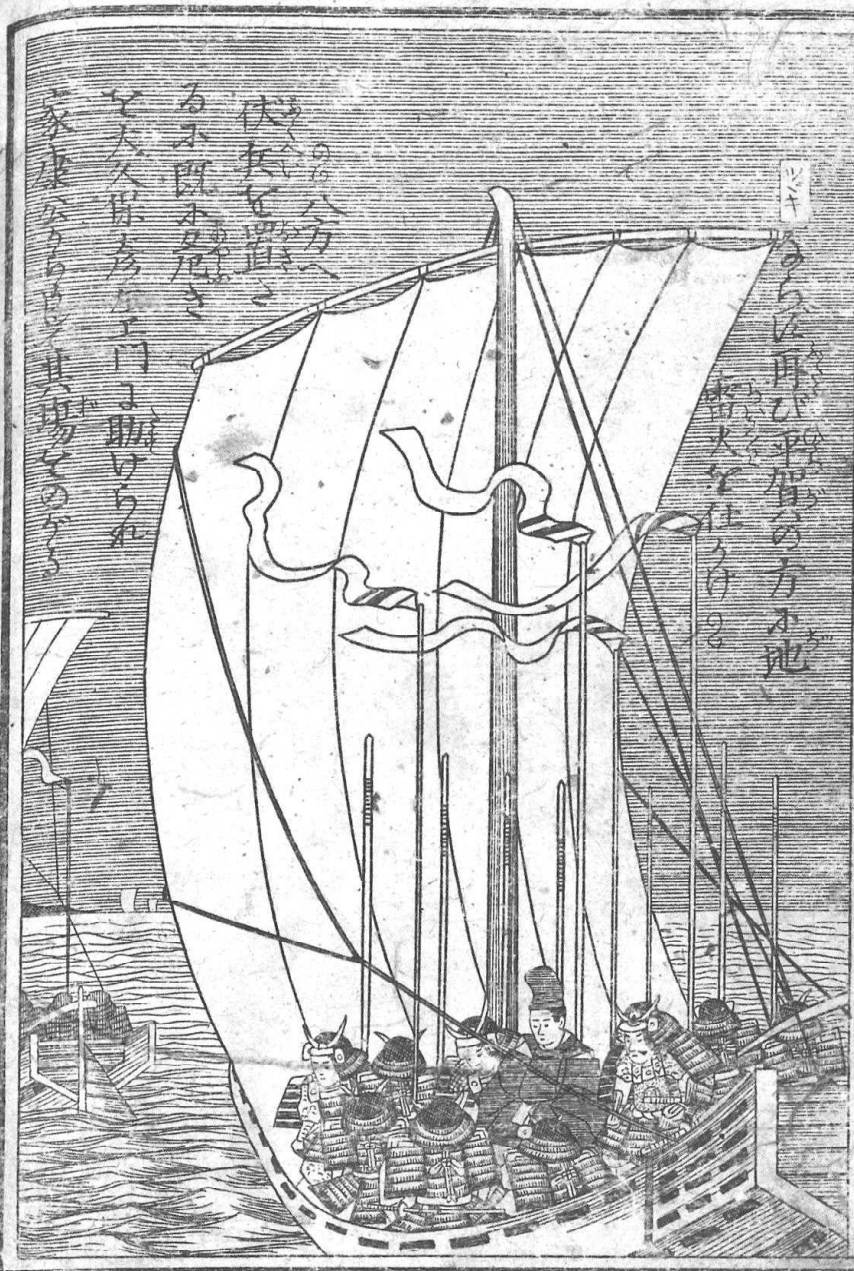




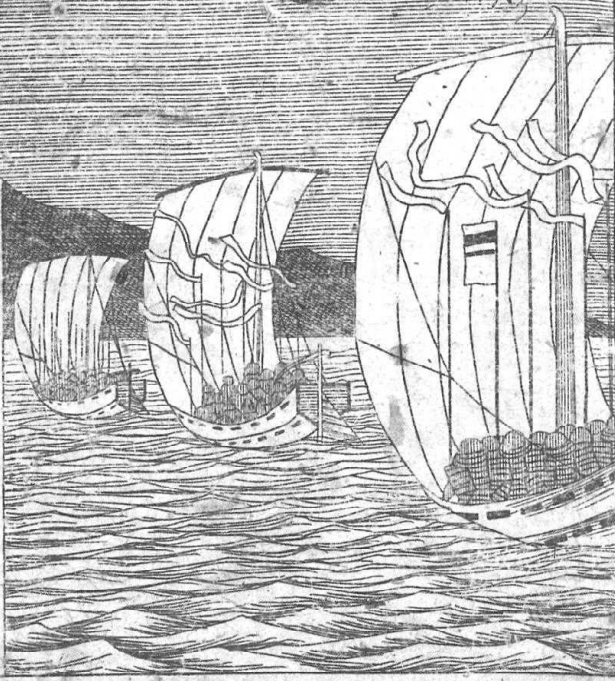








日本無双の幸村もあの時至は是
 非もは元和元年五月七日大坂落城
 るを兼て約せ故島津義弘
 秀頼公の迎はて大船を以て
 兵庫浦に着岸は幸村其懇
 情を謝し則ち秀頼と初め
 幸村大助其他百余人薩
 の方へと落ぬふ義弘厚くも
 ては井上と云所へ新城を築
 き爰に移しける是真田奇
 計より出る所なり古今不思
 議の良将ありめと云り



明治廿年十二月七日御届
 日本橋区吉川町五番地
 編輯兼出版 堤吉兵衛

「絵本 真田三代記」(吉成一七七四) 解答

「1」

武田家
の旗下

真田

弾

正忠幸

隆と云ふ

軍事に

長せし名

将あり

剃髪して

徳斎と号す。男(なん)三人

あり。嫡男信綱と

いゝ二男昌輝(のぶてる)三男

昌幸といふ。何れも

聡明、中にも昌幸ハ真田

安房守と号し、無双の

「2」

勇士なり。

此頃ハ武田ハ

村上義清と激あり。信玄

義清を討

んと一徳斎

に依頼す。真

田了承して

臣下を集ひて

軍議しける。村上が

軍師薬師寺

左近を退けんと

計略を議しける

に原若狭の守が

弟

宗左

エ門(そうざえもん)進ミ出、

意見を述しに、

一徳斎悦び、其

翌日軍議の席

に須原の言バ

を用ひず、鉄扇

にて眉間を打、須

原無念に思ひ、

村上方へ至り、主

人の非

を挙げ、

臣下に

なし

玉ハれ

といふ。

然し

某(それが)し未だ

岩尾にあれ

バ、御味方の

手始めに

強勢(がうぜい)三百騎

を貸玉へバ、

〔3〕

一徳斎の首を

得んハ方寸の中（うち）に

在りといふければ、

義清悦び、薬師

寺左近・清野（きよの）六郎

と云大強（だいがう）の者をめし

ける。原是を引卒

して、岩尾に戻、二の

丸に入や、突然と

真田勢一時に打

かゝれば、薬師寺・

清野茲に討る。

義清是を聞て

憤り、三千余騎

を以て岩尾に押

寄、戦ふと雖トモ、真

田が計（はかりこと）に士卒千余人

皆火中に焼死（やけしに）たり。去

程に信玄ハ木曾義

昌を責んと真田

兄弟を先鋒として

御嶽（ミたけ）の城を責る。木曾

の強将伊奈九郎、甲府勢を

なやます。一徳斎が造る宿砂筒にて

〔4〕

伊奈を

討取る。其外木曾

の重臣、追々討

死せしめば、義

昌今ハ是迄

と本丸に引

揚、切腹せん

と

す。此時

昌幸兄に

云ふ。今木曾殿

生害と覺

たり。

我祖海野小太郎ハ

義仲の幕下なり。

君臣の

よしミあり。

信玄公へ

和睦を

すゝめ、木曾

殿を

〔5〕

助けんといふ。兄も

尤もとて、穴山小助を

使者として、其旨を

木曾殿へ述る。

木曾主従宜しく

計ひ玉ハれと小助を

厚もてなし返しける。真田

兄弟、信玄へ和睦を乞

ひしに、承引して、一族のよし

ミを結バんと息女を義

昌におくりける。是安房

守が功なりとて、義昌の

長臣

大庭

奎之

助が

女（むすめ）

〔6〕

義昌自媒人（なかうと）して

昌

幸

の室

とな

す。之幸村

の母なり。

時移り、一徳斎

病死し、昌幸父に

父に劣ず、武田家

に忠節を尽すと

雖トモ、主君信玄、昌幸・

山形

等か

諫（いさめ）を

用ひ

す。終

に長篠

〔7〕

露

と消、嫡子

勝頼、尚天目

山に亡び、其子勝

千代丸を守護し

時節を計り、武田

家を起さんと、信

州上田の城に籠

りける。此時織田信長天下を

呑ん勢にて、上田の城を責

んと徳川家康公を

初しめ、諸将を

つどひ、四方よ

り同時に

責立

ける。其

勢三十

万余

〔8〕

十四日上田の

城へ責寄り。

其有さま、今

上田城を一トもミに

踏つぶさん勢ひ

なり。去バ徳川・

織田・北条各（おのおの）剛臣

士卒を上げまし、

息をもつかず

攻（せむ）れども

昌幸・幸村

が神変

不思議

の妙計を

行のふい内へ

当り難く

日夜士卒□

費すのミ

〔9〕

此上ハ如何なる謀計

にて攻むへきやと鬼神

を欺く三将もあぐミはて

てぞ見へにける。此時羽柴筑

前守秀吉ハ中国にありしが、

上田攻の事をきゝ急ぎ汗

馬に鞭を加へて引返し、信

長が存意をきゝ只一人

上田の城中に至り、

昌幸が心中をきく

に主人勝頼天目山に

亡び、其遺命にハ

七才になりける所

の勝千代丸

〔10〕

もつて

武田家を

再興いたさ

せよとの事、

就てハ甲信を

下さるゝに及

むて、我々親

子が首ハ

三将に献するとも

「くるしか」

らずと云。

思ひくん

だる忠

言に

秀吉其忠節を感じ、誠に

尤もなる事

かな。人の臣と

してハ忠に死

し、人の子と

してハ孝に

〔11〕

止ること、人

間の習ひとハ

いへと、守

るもの

甚だ

少く、小山田兵エ・跡

部長坂長閑の

ごときハ、是

某国の

奸臣とやいわん。真田

が如きハ開国の元凶

とやいわん。賞せずんバ

有べからずとて、

是より秀吉

が取持にて、勝千

代十五

才に

およぶ

時ハ、甲信を相

わたすべし

と約せしかバ

真田が

〔12〕

望

しも違（たが）

い、三将も

囲ミを解た

り。

扱夫より

星霜押移

り、秀

吉天下

を一統

して

〔13〕

后、豊

公薨じ玉

ひ、秀頼公

幼年、家康

公天下の後見

たりが、石田三成が

企にて、関東・

大坂、関ヶ

原に戦

争

あり。其

頃真田ハ上田

を開

城な

し、紀

州九度

山に身

を塞（ひそ）め、閑

窓に月日を

送りし内、昌

幸病死せし

より、幸村

〔14〕

尚遺命を守りけれど

親子の別れをかなしミ、

其後愚頓となり、

田野に鋤を

かゝげ、農

業透にハ

打紐を綾とり、嫡

子大助治幸ハ終日

川獵遊漁なせしか

バ、さながら上田の城

主が果（はて）とハ見

へさりける。

然るに

慶長元年

秀吉薨じ、秀

頼を家康

輔

助すと雖

も、天下の

大小名名（みな）

徳川によ

る。真田ハ

関東に寄

ず。其心は

かられず

を

〔15〕

家康公

様子を

探らせけるに、

真田父子、昼の

窓（よほう）と替り、よるハ張

抜つづを作り、傍にハ

大助軍書を読むこと水

の流るゝが如し。家康公

之をきゝ安からず思ひ給ふ。

時に慶長十九年、秀頼公が

召に応じ、大坂の大元帥となり

日本国中の大軍を引受、家康公

を屢々（しばしば）悩し、終に和睦となり

しが、再び破れて、翌年夏御陣に

幸村茶臼

山の陣に忍

入り、宿砂筒

を以て家康公を討んと

なれども、御運つ

よく、其功

〔16〕

ならず、再び平賀の方に地

雷火を仕かけ

八方へ

伏兵を置た

るに、既に危き

を大久保彦左エ門に助けられ、

家康公からうして其場をのがる。

日本無双の幸村も天の時至ず。是

非もなし、元和元年五月七日大坂落城

なす。兼て約せし故島津義弘、

秀頼公の御迎として大船を以て

兵庫浦に着岸す。幸村其懇

情を謝し、則ち秀頼を初め

幸村・大助其他百余人、薩摩

の方へ落給ふ。義弘厚くも

てなし、井上と云所へ新城を築

き、爰に移しける。是真田が奇

計より出る所なり。古今不思

議の良将なり。めでたしめでたし。

明治二十年十二月七日御届

日本橋区吉川町五番地

編輯兼出版 堤吉兵衛